

『黄昏れ』

今日 あした

「ピンポン」

「お向かいの山口です。鍵が落ちていましたが、三上さんではないでしょうか？」

杏子がインターホンに声を掛けると、ご主人がズボンのポケットを探りながら出てきた。

「そうです、そうです。車のキーも家の鍵も全部くっつけているのですよ。気が付かなかったなく。いや、どうもありがとうございます。こりやあ山口さんに足を向けて寝られませんか」

「よかったですわ」

「いや、ありがとうございます。どこにありました？」

「ゴミの集積場です。少し前にそこでお見かけしたので、三上さんではないかと思つて……」

「そうですか、家の鍵は特注で作ったばかりでした。いや、ありがとうございます」とご主人に何度も頭を下げられた。そういえば、ゴミを出しに来たのもこのご主人だった。奥さまはどうしたのだろう？ どうして特注の鍵を作ったのだろう？

こんな時にパパが生きていたらどんなに良かっただろう！とつくづく思う。

山口家では、長男が生まれた時から、夫婦はお互いを「パパ、ママ」と呼んでいる。長男はとつくに「パパ、ママ」なんて呼ばなくなったが、二人はそう呼び合っていた。

杏子の家がこの郊外都市に越して来たのはパパと結婚して間もなくだったので、住み始めてからかれこれ五十年位の月日が経っている。

ここはバブルの時期に大手の電鉄会社が【充実の街】というネーミングで、町ごと設計をして造った、いわゆるベッドタウンで、ほとんどの人が東京に通勤していた。

パパもここから一時間弱はかかる都心の広告代理店に定年退職まで通っていた。退職してからは、この【充実の街】を散歩したり、庭に花を植えたり、旅行を楽しんだり、二人で機嫌よく過ごしていたが、パパは癌になり一年前に死んでしまった。

パパは優しい人だったが、お喋りだった。無口の杏子を相手に一日中喋っていた。一人でテレビを見ている時でさえ、台所にいる杏子に

「ママ、この女優は何ていう名前？」とか、

「ママ、今度の旅行は京都にしないか？ほら、保津川下り、涼しそうだよ、ちよつと見てごらんよ」などしゃべり続け、あげくに台所に向かつて白々しく「ママ、綺麗だよ」と付け足す。嫌な顔を見ると、もつと喋って機嫌をとろうとするので面倒だから、

「はい、はい」と言っただけに待たずに去ってしまった。

杏子は元来、アクティブな性格ではなく、ただ几帳面なので、趣味は徹底的に掃除をすることと、寝る前に推理小説を読むことぐらいだった。まあ、聞き役の人生は、性に合っていたと言える。

だが、誰にも言えないが、癌の闘病の間中、「ママ、ママ」と、少しも離れたがらない彼に辟易していたので、正直、亡くなった時には重い荷物をやっとなした気分だった。

もつともパパは私にばかりではなく、誰に対してもお喋りだった。ドライブで景勝地に行き、景色を眺めていると、そこに居合わせる夫婦連れの奥さんと話を弾ませる。面白い情報など、奥さんから仕入れてきて、運転しながら話してくれる。

もちろん近所の奥さんとも気さくに話す。

パパが生きていたら三上さんの奥さんのことも情報収集を怠らなかったに違いない。

それにしてもどうしたのだろう、三上さんの奥さんは？

このゴミの集積場には【充実の街】の一区画、杏子の家も含めて十二軒がゴミを出すことになっている。

長い年月には、ここで奥さん同士でよくお喋りをしたものだった。

【充実の街】はかなり大きくて全体で三百軒位の家がある。それがみな、杏子たちが越して来たのと同じような時期に、同じような働き盛りの家族で、それぞれが生活をしてきた。

区画の同じ十二軒は、身内のことから子供達のこと、それに加えてこの町の色々な情報を分かち合ったものだった。

銀行員が多く住んでいる区画の通りを「銀行通り」と呼んでみたり、浮いた噂が立った家が何軒かあると「不倫通り」と名付け、面白おかしく話題にして盛り上がったこともあった。だが、だんだん年を取り、そんな話にも興味がなくなり、今では会っても挨拶をするぐらい。

現在はゴミ集積場の十二軒のうち二軒はいなくなり更地になっている。三上さんの右隣の家は、子供が独立したのを機に夫婦で老人ホームに入ったようだ。杏子の右隣の家は悲惨だった。

もう三年くらい前になるが、早朝のこと。救急車が来て、その後にはパトカー

が来た。

台所の窓から外を見ていた杏子は何事が起きたのかと、二階でまだ寝ているパパの所に行つて

「お隣の小松さんの家に救急車とパトカーが来ているけど、何かあったのかしら」と言うと、パパはすぐに跳ね起きて北側の窓から通りを見下ろし、あわて着替えをして外に飛び出した。そして、小松さんの、もう嫁に行った娘さんに事情を聞いて帰つて来た。

「ママ、小松さんの奥さん、入浴中に脳溢血を起こして死んでたんだつて」

「美香ちゃんに聞いたの？」と、娘さんの名前を言うと、

「うん、昨日の晩、九時過ぎに電話をしても出ないから、もう寝たのかと思つて、今朝電話をしたのだけど、何度かけても出ないから来てみたら、お風呂で死んでいたんだそうだよ、隣の旦那さんは早く亡くなったのだよね」

「うん、でも早いと言つても美香ちゃんが結婚をしてからだつたから、十年前くらいだったかしらね」

「じゃあ、奥さんはすっぽんぼんで昇天してしまつたのだ」

「いやだわパパ、奥さんと言つてもお婆さんじゃない、私も死ぬときはそのパターンがいいわ」

「えーっ、服ぐらいは着た方が良いのじゃないかー」

そんなことを思い出していたら、ますます三上さんの奥さんのことが気になるだした。いつから見えていないのだろうか。とは言つても、ご近所の誰に会つても、ほとんど意識をしていないので考えるだけ無駄である。

「あー、パパが生きていたら：：：」そんなことを考えながら外に出て道路を掃いたり、庭木の水やりをしたりしてふと道路の向こうの家を見た。

あら、三上さんの家、車がないわ。

さつき鍵を届けた後から、ご主人は出かけたのかしら？それとも、奥さまが一人で車を運転して出かけているのかしら？

杏子は急に気になりだした。気が付いたら、フラフラツと門を出て、道路を渡つて三上さんの家の前を歩いていて。通り過ぎぎわに顔を向けると、南側の窓のカーテンが開いていた。あそこなら中に居る人が見えるのではないかしら、そんなことを思いながら次の角まで行つて戻つて来た。

あからさまにジロジロ見るわけにはいかないけど：：：、そう思いながらガラス窓に目を向けると、窓の前に立って外を見ていたらしいご主人と目が合つてしまった。杏子は気が付かないふりをして行き過ぎようと、前を向いて歩きだした。

「山口さん、どうかされたのですか？」

杏子の背中に三上さんのご主人の声でした。

三上さんはガラス窓を開けて庭下駄を履き、垣根まで急いで出て来たらしい。困った！ 杏子とはつさに首に巻いたタオルを取って丸めて両手で持った。

「山口さん、何かご用でしたか？」

「いえ、あの、洗濯物が飛んだので取りに来ましたの」

「あーそうですか、で、回収できましたか？」

「はい」

杏子はそう応えて、ぐるぐるに丸めたタオルを少し持ち上げ、慌ててお辞儀をして道路を渡った。

私はどうかしている！ 杏子は思っている。三上さんの奥さんが居ても居なくても、杏子には関係ないじゃない！ 何故気になるのだろう。我ながら、バツカみたい！

そう思っていると、後ろから「プーププー」と、クラクションの音がした。振り返ると、一人息子の国丸が会社の名前のロゴが入った車の運転席で笑っている。驚いて車に近づくと、ウインドーを開けた国丸がニコニコ笑いながら「おかん、ちゃんと生きてる？」

「あら国丸、どうしたの、何しに来たの？」

杏子たち夫婦が「パパ、ママ」と言い合っているのに、国丸は従弟たちの影響もあって両親のことを「おとん、おかん」と呼ぶ。

「やあ、国丸君、しばらく見ないうちにすっかり大人になってしまったんだね」

三上さんも踵を返して話に加わった。

「ああ、三上さんのおじさん、こんにちは、いやだなー、もう五十ですよ僕」

「えー、五十か、スポーツ用品のメーカーに勤めているの」と車に書いてあるロゴを見ながら「こっちが年を取るのも無理もないね」と言った。

三上家には子供がいなかったの、小さい頃は、向かいの国丸を夫婦で可愛がってくれていたのだ。

「はい。あ、おばさん、お元気ですか？」

「ああ、元気も元気、世界遺産巡りに目覚めて一人であっちこっちに旅行しているよ」

「おじさんは行かないの？」

「そんな元気、ないよ。それに【充実の街】も若い人がどんどん出て行ってしまふから、空き家や空き地だらけで物騒だろう」

「ふーん、そうなんだ！」

思わぬところで三上さんの奥さんの情報が分かって、杏子はホツとしたり、後ろめたい気持ちもあったりして、

「国丸、何か用事でもあるの」と、話題を変えた。

「そりゃあないだろう、一人息子としては、おかんがちゃんと生きているか、

困っていることはないか心配して時々寄ることにしているのに！」

「あらそうなの、私は十年や二十年はほっておいても大丈夫よ。心配なんかしないですよ」

「素直じゃないよね、おかんは！」

実際、その通りで、杏子は国丸の顔を見ると余計な心配ばかりしている。

朝ごはんは食べたのかしら、困ったことでもあるのじゃないかしら、それにしても、だんだんパパに似て来る。白々しく心配する所なんかそっくりじゃないの。嫁に見捨てられたらどうしよう、そんなことを思いながら、内心、ほくそ笑んでいる自分にあきれている。

「山口さんは薄情だな、国丸君が心配しているのに……」

三上さんが茶々を入れる。

「はい……」杏子は下を向いて返事をした。

「お婆さんは何処に行かれたのですか？いつ帰られるのですか？」

杏子の知りたいことを、国丸ははずけずけと質問する。

「お婆さんはね、今、韓国に行っているのだよ。成田まで車で行って駐車場に預けて……、慣れたもんだよ」

「一人で？ 凄いな、お婆さんは！」

「そうだよ、おじさん一人、留守番だからって、家の鍵を最新式のに変えたりして……。それなのにおじさんは鍵を落としちゃって、国丸君のお母さんに届けてもらったのだよ。」

先ほどはどうも……」

「いいえ、どうも」

杏子は、あたふたと返事をしながら、あまりにパパに似てきた息子に辟易としている。

ん？ 本当にそうだろうか。杏子が気になっていたことの総てが解決したのに？

「パパ、何で私を置いて行ってしまったの！」

気が付けば、又、パパに恨み言を言っている杏子だった。

了 (4, 240字)